

巻頭言

沖縄県民投票の叫び

坂井 豊貴（慶應義塾大学経済学部教授）

今年の2月24日に沖縄県民投票がなされた。選択肢は三つ。辺野古基地を建設するための海の埋め立てに、「賛成」か「反対」か「どちらでもない」かだ。むろん三択の投票とは珍しい。こうなった経緯を大まかにいうと、「どちらでもない」の選択肢を入れないと、宜野湾市をはじめとする5市が投票を実施しないと抵抗したのだ。これにより、全県で実施するため、「どちらでもない」が選択肢に加えられることになった。

最終的に、投票結果は「賛成」が約19%、「反対」が約72%、「どちらでもない」が約9%となった。圧倒的な反対多数である。この結果でよかったのは、「どちらでもない」への票が少なかったことだ。もし「どちらでもない」が最多票を集めていれば、結果の解釈はきわめて困難であったろう。そこまですではなくとも、もし「賛成」と「反対」がいずれも過半数の票を集めていなければ、賛成派は賛成寄りに、反対派は反対寄りに「どちらでもない」を解釈しなくなっただろう。すなわち「どちらでもない」に多くの票が入ると、結果が解釈できなくなったり、恣意的な解釈をしやすくなったりするのだ。もちろんそうしたことを狙って、「どちらでもない」を選択肢に加えるよう求める人がいたのだろう。なかなかの意地悪だ。

この県民投票に、何かを決定する法的な力はない。あくまで沖縄の人々が意思を示す貴重な機会なのである。「どちらでもない」という選択肢があると意思表示の幅は広がるが、第三者にはその選択肢に込めた

思いは分からない。せっきく意思を表示しても、伝わらねば意味はない。だから「どちらでもない」を加えるのは、意思表示の幅を広げるという親切なフリをしているぶん、狡猾なのである。

私は投票前の1月26日に、沖縄を訪れた。沖縄国際大学で投票について講演するためだ。そこでは上述のようなことを話した。沖縄国際大学には、04年の夏、米軍ヘリが墜落・炎上する事故が起こった。私は初めてそのキャンパスを訪れたのだが、普天間基地とあまりに隣接していることに驚いた。このことは知識として知ってはいたが、大学の真隣に基地があるということ、これまで真面目に考えたことがなかったのだ。大学の真隣に基地があるというのが、危険で、怖いものであると、そのとき初めて実感した。

「どちらでもない」に込められた想いは、さまざまあるのだろう。そのなかには埋め立てに「賛成」とか「反対」とかではなく、「沖縄県外に基地を建てよ」という想いもあるはずだ。そしてその想いは、「賛成」の人にも「反対」の人にも共通のものであろう。

沖縄県民投票で、強い意思表示がなされた。差し向けられた先は政府、そして日本本土に居住する人々である。その意思を、私を含むそれら人々は、自分に差し向けられたものとして受け止めねばならない。このまま辺野古に基地が建てられるのは、認められないのだという。「愛の反対は無関心」というのが本当にその通りだ。このたびの沖縄の叫びに、耳を傾けてほしいと思う。